私語に拠る

北九州市立思永中学校教諭　加藤 陽一

生徒を注意するときの教師の常套句に「私語をするな。」があるが、教師になったときのわたしの密かな決意の一つが、このフレーズは絶対に使うまいということだった。「なぜ？」と疑問に思われる方は、「私語」の対義語を考えてみてほしい。「公語」という言葉こそないが、そこに隠れて存在するのが「国家語」であることは容易に想像できるだろう。

本来、「私語」とはささやきを意味した。

富国強兵政策の中核を担った日本の公教育の歴史の中で、国語教育は、生活に根ざした豊かな「私語」を否定し、子どもたちを「国家語」の枠の中に囲い込む役割を、一面において常に持たされてきた。それに対し、切り捨てられた「私語」の豊かさに形を与え、子どもたちの拠り所とさせようとしてきたのが、生活綴り方に代表される民間教育運動の歴史にほかならない。そのとき、「国語の力」とは、「私語」を自らの拠り所として生きる力のことであった。そして、今、性急にその結論を変えるべき新たな状況があるとは、わたしには思えない。

最初はいばって大酒を飲み、かんしゃくを起こして手を上げる父親だったけど、父から、一点一画もおろそかにしない大ぶりの筆で『向田邦子殿』と書かれ、ひどくびっくりしたときから、父に対する『私』の気持ちが変わってきたように、僕の父に対する気持ちが変わったのは、両親が離婚してからだ。父と暮らすようになって以来、父の僕への接し方が変わった。以前は、朝から晩までずっと仕事だったが、側にいて話しかけてくれることが多くなった。そこから僕は『父親』を思うようになった。向田さんから見た「暴君」も「優しい父」も「大人の男」も、すべてが向田さんの父の本当の姿であるように、「離婚前の父」も「離婚後の父」も、本当の僕の父の姿なのだと思う。男手一つってわけではないが、ここまで育ててくれた父。最近はケンカしてばかりだが、本当は僕自身『ありがとう』って言いたいだけなのかもしれない。

本年度の『字のないはがき』の授業後、「身近な大人に対する自分の見方の変化」をテーマに書いたS君の作文である。

十代は葛藤の時期。自分に対して、家族や友人に対して、社会に対して、さまざまな葛藤を経ながら、男子生徒は「男」になり、女子生徒は「女」に変貌していく。その自立の過程で、深浅の差こそあれ、傷つかない者はいない。しかし、生身の自己は傷ついても、己のものとなった言葉（認識、方法、思想と呼んでもよい）は決して損なわれることなく、自己を支え続けてくれるものだ。そんな言葉を、授業を通じて生徒たちに伝えたい、そう考えて国語教師になり、二十数年が過ぎ、今なおそう考え続けて授業している。

松尾芭蕉は自らの俳諧に「不易流行」を求め続けたが、ともすれば「流行」だけに染まりがちの現場において、自身の授業の「不易」＝原点を問うことの重要性を忘れてはならない。時代が変われば、生徒は変わる。手段やプロセスを変える必要性は常にあり、そこに困難はもちろんあるのだが、求めるべき到達点は変わらないし、変える必要もないとわたしは考えている。